

特別企画展 展示構成（案）

版画家が刻んだ昭和の彩り —館蔵版画集を中心に—

会 期：令和7年3月15日（土）～5月11日（日）

【前期】令和7年3月15日（土）～4月13日（日）

【後期】令和7年4月15日（火）～5月11日（日）

会 場：昭和館3階研修室

後 援：千代田区・千代田区教育委員会

展示点数：143点

内訳：

① 実物 143点

※前・後期：各93点、うち展示替え52点

ごあいさつ

昭和館には、昭和の情景をテーマとする版画集など、約 600 点の木版画が所蔵されています。

所蔵品には、関東大震災から復興した街並みを複数人の版画家が描いた『新東京百景』や、空襲被害を受けた大阪の都市を回顧するため赤松麟作によって制作された『大阪三十六景』などが含まれ、急速な変化を遂げた昭和の街並みや人びとの生活が描かれています。

本企画展では、当館が所蔵する版画集に焦点を当てて、版画家たちが木版画に刻んだ昭和の情景を紹介します。

本展では、「Ⅰ．近代化の風景を刻む」、「Ⅱ．木版画による報国活動と版画集の制作」、「Ⅲ．戦前への回顧と版画家たちの戦後復興」のコーナーに分けて紹介します。

プロローグ 木版画前史

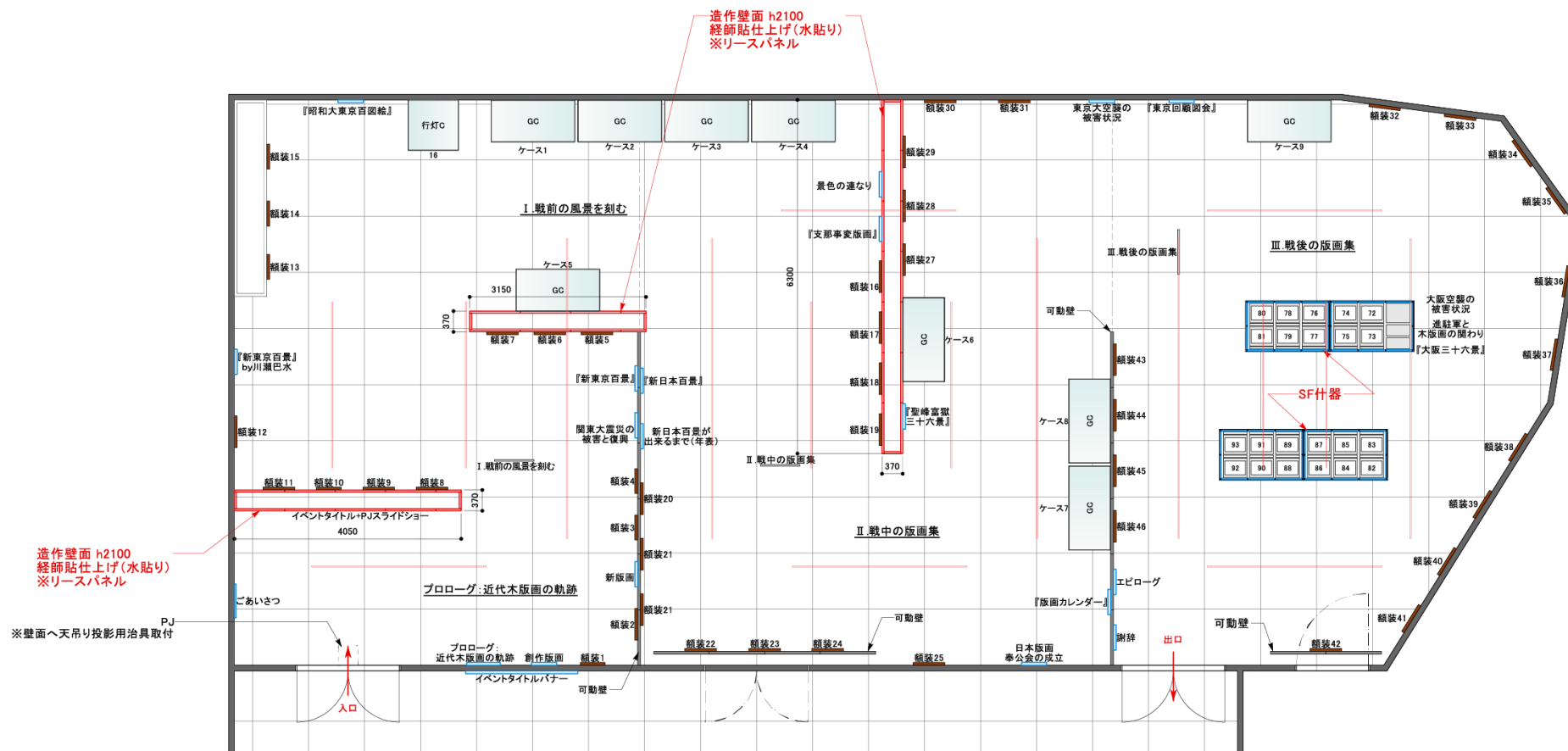
Ⅰ．近代化の風景を刻む

Ⅱ．木版画による報国活動と版画集の制作

Ⅲ．戦前への回顧と版画家たちの戦後復興

エピローグ

【平面図】



プロローグ：木版画前史

江戸時代に浮世絵として人気を博した木版画は、安価で量産可能な性質から広告や包み紙、新聞錦絵、報道画などに用いられ、日常生活に根付いていました。しかし、明治期以降、活版印刷や写真技術が国内に流入すると、木版画の需要は激減します。

この状況を危惧した画家や版元たちにより、明治末期から昭和初期にかけて木版画を再興する機運が高まります。芸術性を高め、普及することを目的として、新しい木版画の制作方法が模索されました。この二大潮流となったのが、創作版画と新版画です。これらが近代木版画発展の基礎となりました。

創作版画

明治37年(1904)、雑誌『明星』に掲載された山本 鼎^{かなえ}の「漁夫」が創作版画の端緒といわれています。従来、木版画の制作は絵師・彫師・摺師の分業制でした。創作版画では、この全ての工程を版画家自身が行い、個性と芸術性が表現されています。木版画を複製ではなく、創作された美術作品として地位を確立することを企図して制作されました。

大正7年(1918)に日本創作版画協会(現・日本版画協会)が設立され、昭和2年(1927)には帝国美術院展覧会第二部に創作版画部門が加わりました。



「御苑内之景」(『新京都風景』)

『新京都風景』は、京都府出身の版画家である徳力富吉郎・浅野竹二・麻田 辨 自^{べんじ}によって制作された版画集。大丸美術部から限定100部が出版された。

浅野竹二
 刊行：大丸美術部
 昭和5年(1930)



「浅草寺仁王門」(『江戸の門版画集』)

『江戸の門版画集』は、前田政雄によって昭和11年から3年をかけて制作された版画集。明治期以降の災害と開発によって江戸期の風情が消えることを憂い制作された。

前田政雄
 昭和11年(1936)から昭和14年

新版画

従来の浮世絵版画と同様に、分業制によって制作された木版画を新版画といいます。浮世絵の需要低下とともに技術が衰退することを憂い、浮世絵の復興と新しい浮世絵版画を創出することを目的として制作されました。

大正4年(1915)、海外輸出用の浮世絵制作に関わる版元・渡邊庄三郎が中心となり、新版画の試作に乗り出します。肉筆画と大差ない作品制作を目指した渡邊は、洋画家の橋口五葉や日本画家の伊東深水や川瀬巴水らに次々と原画を依頼し、新版画を発表しました。



「品川」(『東海道風景選集』)

『東海道風景選集』は、川瀬巴水が独自の視点で東海道風景を描くために着手した版画集。昭和6年から写生・制作を開始し、戦時下の中断を経て、昭和22年に完成した。

川瀬巴水
 刊行：渡邊木版画舗
 昭和6年(1931)から昭和22年

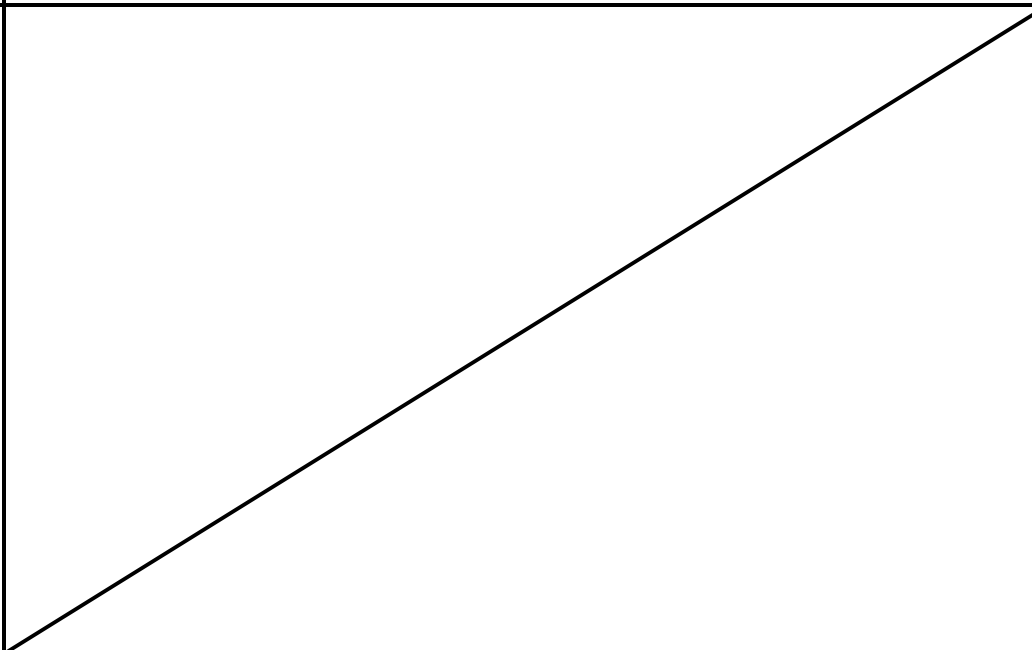


「隅田川」(『東京風景』)

『東京風景』は、フランス人版画家・ノエル・ヌエットによって制作された版画集。ヌエットがスケッチした東京の風景の中から24図を選び、土井版画店より出版された。

ノエル・ヌエット
 刊行：土井版画店
 昭和11年(1936)

I. 近代化の風景を刻む

I. 近代化の風景を刻む 大正期以降、版画雑誌や指南書の刊行、版画家による全国各地での講習会などにより、木版画の制作が全国的に広がりはじめます。洋画家や日本画家たちも木版画に着手し、各地の版元たちの活動も活発になりました。 大正 12 年（1923）9 月 1 日、関東大震災が発生し、南関東を中心として広範囲に被害がもたらされました。東京一帯は大規模な火災にみまわれ、在京の版画家や版元たちは版木やスケッチ帳、商店などを焼失しました。同月 27 日に帝都復興院が設立されると、昭和初期にかけて復興が進められました。この復興計画により、東京では耐火・耐震を目的としたコンクリート製の建造物が増加し、都市が近代的な発展を遂げます。復興後の新しい東京の街並みは、版画家たちの創作意欲を刺激し、『新東京百景』と題した版画集が複数刊行されました。	関東大震災からの復興 大正 13 年（1924）2 月の復興院解体後、業務を引き継いだ内務省復興局と地方自治体により大規模な復興事業が開始されます。土地の区画や幹線道路、橋などの整備、防火対策や教育施設の設置などの復興が進められました。東京では昭和通りと大正通り（現・靖国通り）が道路整備の中心となったほか、清洲橋などの鉄橋が復興事業の一環として、昭和初期に架けられました。 また、震災当時火災の焼け止まりとして公園が有用だったため、隅田公園をはじめとした 3 か所の震災復興公園が昭和 3 年（1928）から 6 年にかけて造園されました。震災以降、建造物は不燃化が推進され、鉄筋コンクリート製の建物が増加します。
『新東京百景』 昭和 4 年（1929）から昭和 7 年 刊行：創作版画倶楽部 版画同人グループ卓上社によって制作された版画集。関東大震災の被害から復興した新しい東京を後世に伝えるために制作された。浅草や渋谷などの地域、江戸橋や言問橋をはじめとした震災復興橋梁など、震災後に再建・新築された建造物や地域が画題に多く選ばれた。昭和 3 年（1928）に、日本橋丸善で開催された第 1 回卓上社展出品の『東京風景』をもとに、深澤索一が制作を呼び掛けた。翌 4 年、『新東京百景』として正式に頒布が開始された。約 4 年で全 100 点各 50 部の木版画を頒布した。	

I. 近代化の風景を刻む

作者紹介：恩地孝四郎^{おんちこうしろう} 明治 24 年（1891）～昭和 30 年（1955） 東京府南豊島郡（現・東京都新宿区）生まれ。明治 44 年（1911）、東京美術学校（現・東京藝術大学）に入学する。大正 3 年（1914）、学友の田中恭吉・藤森静雄と自画・自刻・自摺による木版画と詩の作品集『月映』を刊行した。昭和 14 年（1939）、陸軍省囑託として従軍。戦時下に設立された日本版画奉公会では理事長を務め、終戦直後より日本版画協会の再建に尽力した。	前期  「東劇斜陽」 昭和 5 年 3 月に演劇場として東京劇場の名称で開場。スパニッシュ式の建築で、築地・銀座界隈のランドマークのひとつとして親しまれた。 恩地孝四郎 昭和 6 年（1931）	後期  「井之頭池畔暮色」 恩地孝四郎 昭和 6 年（1931）	
作者紹介：川上澄生^{かわかみすみお} 明治 28 年（1895）～昭和 47 年（1972） 神奈川県横浜市生まれ。青山学院高等科（現・青山学院大学）在学中、木版画の制作を開始する。大正 10 年（1921）より教職に就く傍ら、制作活動が続ける。昭和 17 年（1942）には、戦時色の強まった学校教育に耐えられず、退職した。以降、木活字を彫り、絵本の制作に着手するようになる。昭和 20 年 3 月には、北海道白老村（現・北海道白老郡）に疎開し、新たな環境で制作活動に励む。	前期  「百貨店の内部」 川上澄生 昭和 5 年（1930）	後期  「丸の内一景」 川上澄生 昭和 5 年（1930）	

I. 近代化の風景を刻む

作者紹介：^{すわかねのり} 諏訪兼 紀 明治 30 年（1897）～昭和 7 年（1932） 鹿児島県生まれ（東京の説もあり）。大正 3 年（1914）、本郷洋画研究所にて洋画家・藤島武二の教えを受ける。大正 8 年、第 1 回日本創作版画協会展を観て、版画家を志し、第 3 回から第 5 回にかけて同展に続けて入選を果たした。大正 14 年に、資生堂に入社、意匠部に勤める。以降も同展に出品を続け、昭和 3 年（1928）に日本創作版画協会会員に推薦された。	前期  「新橋演舞場」 新橋演舞場は、新橋花柳界の重鎮・川村徳太郎の発案で計画された。大正 12 年（1923）に着工、建設途中で関東大震災の被害に遭い工事が一時中断するも、大正 14 年に開場した。 諏訪兼紀 昭和 4 年（1929）	後期  「江戸橋」 江戸時代、本船町と本材木町の間に架けられた橋。復興事業の目玉のひとつである昭和通りを建設するため、復興後の区画整理に伴って移築された。 諏訪兼紀 昭和 5 年（1930）	
作者紹介：^{ひらつかうんいち} 平塚 運一 明治 28 年（1895）～平成 9 年（1997） 島根県松江市生まれ。洋画家・石井柏亭の洋画講習会参加をきっかけに画家を志し、彫師・伊上 凡骨^{いがみほんこつ}の内弟子となる。昭和 2 年（1927）、技法書『版画の技法』刊行を契機に、木版版画の講習会開催や東京美術学校（現・東京藝術大学）での講師就任など、木版版画の普及活動と後進育成に尽力する。戦時下においても、門下生を集めた「きつつき会」の結成や北京での木版画指導など、普及活動に勤しんだ。昭和 32 年に渡米、以降は同地で制作活動を続けた。	前期  「八重洲口通」 震災復興に伴って八重洲通りにオフィスビルが建設されたことを契機に、昭和 4 年、八重洲側にも東京駅の改札が設置された。 平塚運一 昭和 6 年（1931）	後期  「浅草仲見世」 明治 18 年（1885）の再開発でレンガ造りの仲見世が誕生したが、震災で壊滅的な被害を受けた。大正 14 年（1925）、鉄筋コンクリート造りの桃山風朱塗りの商店街として再建した。 平塚運一 昭和 5 年（1930）	

I. 近代化の風景を刻む

作者紹介：^{ふかざわさくいち}深澤索一 明治 29 年（1896）～昭和 22 年（1947） 新潟県西蒲原郡生まれ。本名は作一。大正 10 年（1921）、諏訪兼紀と出会い木版画を始める。翌年の第 4 回日本創作版画協会展にて初入選、川上澄生と知り合った。版画集刊行の傍ら、協会展への出品や版画誌への作品投稿など積極的に制作活動を行った。	前期  「言問橋」 内務省復興局が担当した隅田川六大橋のうちの一基で、昭和 3 年に完成した。橋付近の両岸には隅田公園が建設されるため、景観を考慮してデザインされた。 深澤索一 昭和 5 年（1930）	後期  「築地」 明治 32 年（1899）の居留地廃止以降も、洋館が並んでいたが、関東大震災の火災により焼失した。復興後は晴海通りが開通し、大規模な区画整理が行われた。 深澤索一 昭和 4 年（1929）	
作者紹介：^{ふじもりしずお}藤森静雄 明治 24 年（1891）～昭和 18 年（1943） 福岡県久留米市生まれ。同郷出身の洋画家・青木繁との出会いを契機に、東京美術学校（現・東京藝術大学）を目指す。明治 44 年（1911）、東京美術学校西洋画科に入学、黒田清輝・藤島武二から指導を受ける。学友の恩地孝四郎・田中恭吉らとともに作品集『月映』の刊行を計画、第 7 号まで刊行した。卒業後は福岡や台湾で教鞭を取った後、再度上京した。第 1 回日本創作版画協会展から出品を続けたほか、各展覧会で作品発表を行った。	前期  「靖国神社」 中央の大村益次郎像は明治 26 年（1893）に日本初の西洋式銅像として靖国神社外苑内に建立された。震災によって拝殿等が被害を受け、約 5 万人が外苑を含む神社内に避難した。 藤森静雄 昭和 6 年（1931）	後期  「中央气象台」 明治 8 年（1875）に内務省地理寮内に前身の東京气象台が建設された。明治 20 年 1 月に中央气象台に改名、大正 12 年に麹町区（千代田区大手町）に移転した。震災により多くの建物が焼失したが、同敷地内に再建された。 藤森静雄 昭和 4 年（1929）	

I. 近代化の風景を刻む

作者紹介：逸見^{へんみ}享^{たかし} 明治 28 年（1895）～昭和 19 年（1944） 和歌山県和歌山市生まれ。上京後、ライオン歯磨本舗小林商店（現・ライオン株式会社）の意匠部に勤務する。大正 8 年（1919）、新聞広告で知った第 1 回日本創作版画協会展に出品すると、木版画 2 点が入選した。以降、同展に出品を続けながら版画誌にも作品を投稿するようになった。	前期  「牛込見附」 逸見享 昭和 4 年（1929）	後期  「植物園」 逸見享 昭和 4 年（1929）	
作者紹介：前川^{まえかわ}千帆^{せんぱん} 明治 21 年（1888）～昭和 35 年（1960） 京都府京都市生まれ。本名は重三郎。関西美術院で洋画家・浅井忠や鹿子木孟郎に師事する。同時期、画家・南薫三の木版画作品に魅了され、風景画の試作を開始、第 1 回日本創作版画協会展で入選する。昭和 14 年（1939）には陸軍省嘱託として日本版画協会を代表して北満に渡航した。同協会の理事、また日本版画奉公会の委員として画材不足のなか、版画カレンダーや『新日本百景』の刊行に尽力した。	前期  「渋谷百軒店」 震災後、比較的被害の少なかった渋谷地域に、被災した店舗を誘致するために開発された商店街。 前川千帆 昭和 4 年（1929）	後期  「五反田駅」 前川千帆 昭和 7 年（1932）	

『新東京百景』

昭和 11 年 (1936)

川瀬巴水

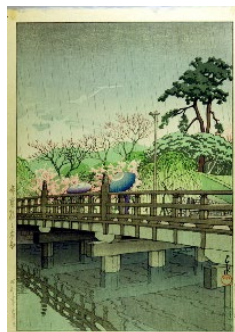
刊行：渡邊木版画舗

昭和 11 年 (1936) から制作が開始された川瀬巴水による版画集。写生と木版画の制作が同時に進められた。しかし、6 作目の摺り合わせが 8 月に行われて以降、制作は止まり、未完となった。芝大門、中央市場、弁慶橋、築地本願寺、佃住吉神社、日比谷公園の全 6 作が制作された。震災後、壊滅的な被害を受けた日本橋から築地へ移転した中央市場や震災復興橋梁として再建された弁慶橋などが描かれている。

作者紹介：川瀬巴水

明治 16 年 (1883) ～昭和 32 年 (1957)

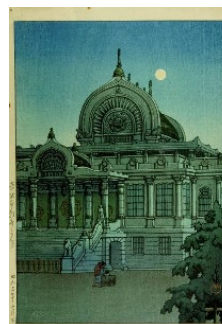
東京府芝区 (現・東京都港区) 生まれ。明治 43 年 (1910)、鏑木清方への入門が許可され、日本画家としての研鑽を積む。伊東深水の作品に感激し、版画制作に意欲を燃やすようになった。大正 7 年 (1918)、渡邊庄三郎の元で「塩原三作」を制作、以降新版画の第一線で活躍する。戦時中は木版画の献納や戦傷病者の慰問旅行に赴きつつ、写生や制作活動を続ける。昭和 27 年、木版画の伝統技術が無形文化財に指定されたことを受け、その技術保存記録として「増上寺之雪」を制作した。



「弁慶橋の春雨」

明治 22 年 (1889)、元の弁慶橋の廃材を利用し架橋された。昭和 2 年に震災復興橋梁として、鉄筋コンクリート製に改架されたが、橋の上部は木造で建造された。

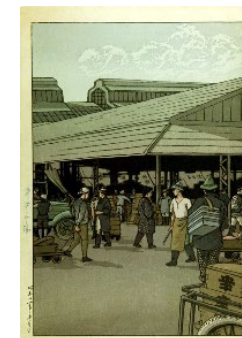
絵：川瀬巴水
刊行：渡邊木版画舗
昭和 11 年 (1936)



「築地本願寺之夕月」

震災による火災被害によって、木造の本堂が焼失した。昭和 9 年、耐震耐火の鉄骨鉄筋コンクリートで再建された。

絵：川瀬巴水
刊行：渡邊木版画舗
昭和 11 年 (1936)



「中央市場」

震災後、日本橋魚河岸が壊滅的な被害を受けたため、当面の善後策として築地に臨時の魚市場を建設した。これが常設的な市場となり、昭和 10 年に東京中央卸売市場が築地に開業した。

絵：川瀬巴水
刊行：渡邊木版画舗
昭和 11 年 (1936)

I. 近代化の風景を刻む

『昭和大東京百図絵』

昭和 5 年（1930）から昭和 12 年（1937）

小泉癸巳男

小泉癸巳男によって企画・頒布された版画集。江戸・明治・大正と各時代の都市風景が木版画として伝わっているため、震災から復興した東京の風景も昭和版として残すべく企画された。昭和 5 年（1930）秋に制作を思い立ち、「永代と清洲橋」や「三井と三越」など既刊の木版画数点を含めて頒布会を開始する。震災後に建設された浜町公園や隅田公園などの震災復興公園や、震災記念堂（現・東京都慰霊堂）、帝国ホテルをはじめとした近代建築が画題に選ばれている。百景完成後に数点を描き改め、小泉自身による木版画の解説が全点分記載された。

作者紹介：小泉癸巳男

明治 26 年（1893）～昭和 20 年（1945）

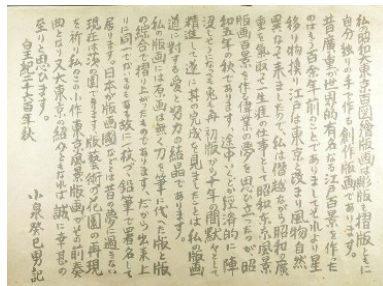
静岡県静岡市生まれ。明治 42 年（1909）、画家を志し上京、日本水彩画研究所や木版工房で学ぶ。木版画の普及に尽力し、版画雑誌・技法書の執筆や講座・共同展覧会の主催などに取り組んだ。大正 7 年（1918）、日本創作版画協会創立の際に会員として参加、同協会展覧会に出品を続ける。『昭和大東京百図絵』のほか、『国立公園』などの版画集の制作も続けた。戦時下では、日本版画奉公会に参加しながらも、持病の悪化のため埼玉県に疎開をした。



頒布用の箱

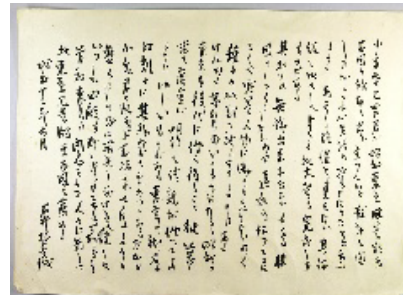
昭和 15 年に皇紀 2600 年を記念して『昭和大東京百図絵』が再頒布された際に納められた箱。頒布された作品は「昭和大東京百図絵 版画完成版」と記されている

昭和 15 年（1940）



自序

小泉癸巳男による版画集の解説。昭和 15 年の再頒布の際に記された。
昭和 15 年（1940）



推薦文

洋画家・石井柏亭による推薦文。自序や推薦文、目録と同様に箱に同封された。
昭和 15 年（1940）

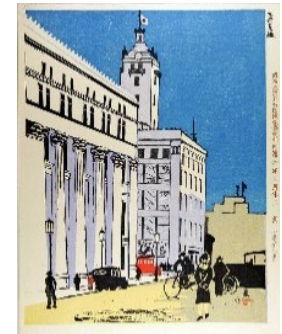


「第一景 永代と清洲橋」

内務省復興局により建設された鉄筋コンクリート製の橋。両橋は対になるようにデザインされ、復興の象徴となった。

小泉癸巳男
昭和 3 年（1928）10 月

前期



「第三景 三井と三越」

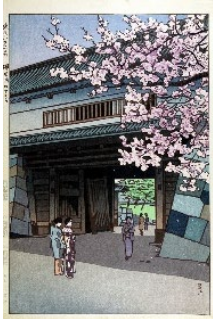
震災による火災で類焼したことを契機に再建された。昭和 2 年に三越が、4 年に三井本館が竣工した。

小泉癸巳男
昭和 4 年（1929）12 月

I. 近代化の風景を刻む

後期  「第二十五景 隅田公園・向島言問」 震災復興公園のうちのひとつ。隅田川を挟んで両岸に整備され、昭和 6 年に開園した。 小泉癸巳男 昭和 7 年（1932）4 月	前期  改題「第十四景 日本ばし区・浜町公園・春雪」 震災復興公園のうちのひとつ。昭和 4 年に開園、被災した日本銀行集会所の一部を利用した記念塔も園内に建設された。 小泉癸巳男 昭和 15 年（1940）3 月	後期  「第二十八景 亀井戸天神の藤花と太鼓橋」 小泉癸巳男 昭和 7 年（1932）5 月	 「第三十三景 本所・震災記念堂」 昭和 5 年、震災において最も被害が出た陸軍被服廠跡地に慰霊のため建設された。鉄筋コンクリート構造で、多くの宗教的な要素を取り入れた建築となっている。 小泉癸巳男 昭和 7 年（1932）9 月
前期  「第六十六景 両国の川開き」 小泉癸巳男 昭和 10 年（1935）7 月	後期  「第四十七景 汽船発着所駒形橋」 内務省復興局が担当した隅田川六大橋のうちの一基。昭和 2 年に竣工した。元来、隅田川を渡るための駒形渡しがあった場所に新設された。 小泉癸巳男 昭和 9 年（1934）3 月	前期  「第八十三景 帝国ホテル玄関」 新本館の開業日に関東大震災が発生したが、震災による大きな損傷もなく、被災者の避難所、各国大使館や新聞各社の事務所として開放された。 小泉癸巳男 昭和 11 年（1936）10 月	後期  「第七十二景 神宮外苑絵画館」 明治天皇・昭憲皇太后の事績を後世に伝えるため、大正 8 年（1919）に着工した。工事中に関東大震災に遭い工事が一時中断したが、大正 15 年に竣工した。 小泉癸巳男 昭和 10 年（1935）11 月

I. 近代化の風景を刻む

芝公園 明治 6 年（1873）に開園した日本で最初の公園のひとつ。開園当初は増上寺の境内が公園として指定されていた。芝公園を画題にした木版画はいくつかあるものの、両者は公園内にある台徳院霊廟惣門を雪景色とともに描いている。	前期  「芝公園の雪」 絵：川瀬巴水 刊行：渡邊木版画舗 昭和 6 年（1931）1 月	前期  「雪ノ芝公園」 前田政雄 昭和 9 年（1934）	
桜田門（外桜田門） 江戸城の門。外側の高麗門と内側の櫓門の二重構造で建設されている。初代桜田門は寛永年間に造営されたものの、関東大震災で一部が破損したため、鉄鋼土蔵造りに改修された。前田政雄は外側の高麗門を、笠松紫浪は櫓門を描いている。	後期  「桜田門」 前田政雄 制作年不詳	後期  「桜田門のさくら」（『東京八景』） 絵：笠松紫浪 刊行：芸艸堂 昭和 29 年（1954）	

Ⅱ. 木版画による報告活動と版画集の制作

Ⅱ. 木版画による報国活動と版画集の制作

昭和 12 年（1937）に日中戦争が勃発すると、国民精神総動員運動が展開され、国民一丸となって戦争に勝つための体制が作られます。版画家たちも銃後のつとめとして、木版画の献納や慰問活動を行いました。木版画に選ばれる題材も銃後の生活や富士山など、戦意高揚を促すものが増加します。版画集の刊行においても文化の進展や報国、慰問を意識した企画が練られました。

戦争の長期化による物資不足が深刻化すると、次第に制作活動にも影響を及ぼします。昭和 18 年 5 月に、日本版画奉公会や日本美術及工芸統制協会をはじめとした美術団体が設立され、版画界を含む美術業界全体が統制されるようになります。

昭和 19 年以降、空襲が激化し、疎開をする版画家も増加します。疎開先でのスケッチや木版画の制作など、限られた状況と資源での制作活動を余儀なくされました。

『支那事変版画』

昭和 12 年（1937）

井川洗厓

刊行：思成堂

思成堂から刊行された挿絵画家・井川洗厓による版画集。題字は書家・池田宙堂が担当した。

日中戦争における戦地での出来事や銃後の生活風景が描かれている。銃後の生活を描いた計 3 点については、戦時下に発行された絵葉書にも採用された。井川は、昭和 15 年に開催された明治・大正・昭和挿絵文化展にシリーズのうち 3 点の原画を出品している。思成堂店主が埼玉県熊谷市に疎開した際に、版木や肉筆画も持参した。終戦後、版木については戦争画という理由で没収されている。

作者紹介：井川 洗厓

明治 9 年（1876）～昭和 36 年（1961）

岐阜県生まれ。明治 25 年（1892）、大阪にて日本画家・稲野年恒に師事し、上京後には日本画家・富岡永洗の元で学んだ。明治 39 年、富岡の関係で都新聞社に入社すると挿絵を担当し、挿絵画家として活躍した。

前期



肉筆画「第三編 千人針」

井川洗厓
昭和 12 年（1937）頃

後期



肉筆画「第五編 支那事変銃後の護」

井川洗厓
昭和 13 年（1938）頃



「第三篇 千人針」

絵：井川洗厓
刊行：思成堂
昭和 12 年（1937）12 月

Ⅱ. 木版画による報告活動と版画集の制作



「第五篇 支那事变銃後の護」

絵：井川洗厓
刊行：思成堂
昭和 13 年（1938）12 月



「第七篇 銃後婦人」

絵：井川洗厓
刊行：思成堂
昭和 13 年（1938）2 月

戦時下における版画家たちの活動

昭和 13 年（1938）5 月 19 日、戦傷病者慰問について協議するため、在京美術団体代表者懇談会が開催されました。文部省（現・文部科学省）や厚生省（現・厚生労働省）関係者、陸海軍係官も出席し、日本版画協会からは前川千帆と藤森静雄が参加しました。同会では、傷痍軍人慰問美術家連盟の結成が決定し、陸海軍病院への作品の献納が決議されました。

昭和 18 年 5 月 11 日には、大政翼賛会文化部のもとで、日本版画協会を含めた 4 団体が統合され、日本版画奉公会が設立されました。同会では、慰問版画制作のための写生会開催や、満蒙開拓青少年義勇軍訓練所の青少年、軍需工場工員のための版画展や講習会の開催、木版画の献納などを行いました。

『新日本百景』

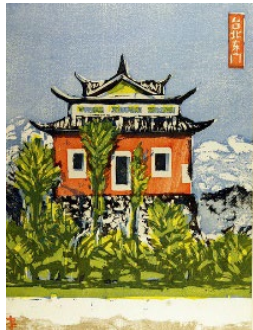
昭和 13 年（1938）から昭和 16 年
編集：藤森静雄・前川千帆（昭和 14 年 4 月より）
印刷：吉田竹三郎・前川千帆
刊行：日本版画協会

日本版画協会が木版画による文化の進展や報国、傷痍軍人への慰問を目的として企画した版画集。第 1 期として全 50 景が選定、第 2 期とあわせて約 2 年半で計画された。企画当初、同協会会員の有志 41 名が、自身で希望地を選出し各県担当の調整が行われた。傷痍軍人への献納と協会運営費への補填のため 150 部の刊行が計画され、版画家自身の自摺ではなく摺師による他摺で制作された。昭和 14 年（1939）には、物資節約の国策に順応する形で部数を減らしての制作となった。昭和 17 年、防諜上の理由から画題の変更や頒布不可なものが出し、物資不足の対策も難しかったため第 13 回全 39 景の頒布で一時中断された。その後、戦災によって制作済みの木版画や版木が全て焼失した。

『新日本百景』が出来るまで

※別紙参照

Ⅱ. 木版画による報告活動と版画集の制作

前期  「大雪山・招き岩」(北海道) 下澤木鉢郎 昭和 13 年 (1938) 12 月	前期  「道頓堀の夜」(大阪府) 徳力富吉郎 昭和 13 年 (1938) 12 月	前期  「上高地」(長野県) 山口進 昭和 14 年 (1939) 3 月	前期  「保津峡」(京都府) 武田新太郎 昭和 14 年 (1939) 8 月
前期  「師崎海岸」(愛知県) 大岩忠一 昭和 14 年 (1939) 10 月	前期  「裏富士」(山梨県) 深澤素一 昭和 14 年 (1939) 10 月	前期  「台北東門」(台湾) 恩地孝四郎 昭和 14 年 (1939) 8 月	後期  「雪の高田市」(新潟県) 内田静馬 昭和 14 年 (1939)

Ⅱ. 木版画による報告活動と版画集の制作

後期  「外房太海」(千葉県) 清水孝一 昭和 14 年 (1939) 4 月	後期  「日向青島」(宮崎県) 川西 英 昭和 14 年 (1939) 4 月	後期  「京三条大橋の雨」(京都府) 旭泰宏 昭和 14 年 (1939) 5 月	後期  「潮来晩秋」(茨城県) 逸見享 昭和 14 年 (1939) 5 月
後期  「奈良東大寺鐘堂」(奈良県) 琴塚英一 昭和 14 年 (1939) 10 月	後期  「冬の猿橋」(山梨県) 小泉癸巳男 昭和 14 年 (1939) 12 月		

Ⅱ. 木版画による報告活動と版画集の制作

『版画カレンダー』

昭和11年（1936）から昭和21年
刊行：日本版画協会

日本版画協会会報などの印刷費捻出のため、同会会員有志により制作・頒布されたカレンダー。全て同一の規格で制作することで、使用後は小版画集として保存できるようになっている。

会費は年間1円50銭の一括払いで、前月月末までに翌月分が郵送された。昭和11年1月刊行の初回分は会報に折り込む形で配布されたが、翌月分以降は申込制で頒布された。木版画のほか、版画家と事務局からの解説書が同封されている。

戦況が悪化した後も、画材や送付用の材料を会員が負担することで制作が続けられたが、昭和19年5月、警視庁特別高等課の要請により頒布が中止となった。終戦とともに制作が再開され、昭和21年1月分より頒布が行われた。

前期



「達磨さん」

畦地梅太郎
昭和18年（1943）1月

前期



「磯一隅」

石崎重利
昭和18年（1943）2月

前期



「雛の月の暦」

前川千帆
昭和18年（1943）3月

前期



「京の夜桜」

山林文子
昭和18年（1943）4月

前期



「五月」

川上澄生
昭和18年（1943）5月

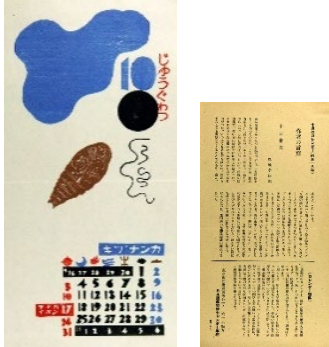
前期



「古染付皿に寄す詩心」

平塚運一
昭和18年（1943）6月

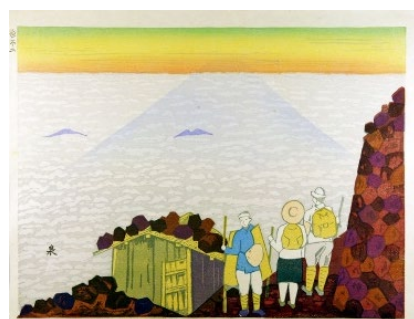
Ⅱ. 木版画による報告活動と版画集の制作

前期 	前期 	前期 	前期 
「鍛工」 川西英 昭和18年（1943）7月	「溪谷に感あり」 柿原俊男 昭和18年（1943）8月	「（無題）」 岩田覚太郎 昭和18年（1943）9月	「十月青天」 恩地孝四郎 昭和18年（1943）10月
前期 	前期 	後期 	後期 
「木所感」 前田政雄 昭和18年（1943）11月	「十二月」 山口進 昭和18年（1943）12月	「年頭の感」 前川千帆 昭和19年（1944）1月	「暖・二月」 山口源 昭和19年（1944）2月

Ⅱ. 木版画による報告活動と版画集の制作

後期 	後期 	後期 	後期 
「雛」 関野準一郎 昭和 19 年（1944）3 月	「春耕」 勝平得之 昭和 19 年（1944）4 月	「桐の花」 守洞春 昭和 19 年（1944）5 月	「おこぜ」 石崎重利 昭和 19 年（1944）6 月
後期 	後期 	後期 	後期 
「七月の田園」 塚本哲 昭和 19 年（1944）7 月	「銃剣の弁」 武藤完一 昭和 19 年（1944）8 月	「昭和 19 年 9 月」 川上澄生 昭和 19 年（1944）9 月	「昭和 19 年 10 月」 山林文子 昭和 19 年（1944）10 月

Ⅱ. 木版画による報告活動と版画集の制作

後期  「昭和 19 年 11 月」 北沢収治 昭和 19 年（1944）11 月	後期  「昭和 19 年 12 月」 根本霞外 昭和 19 年（1944）12 月	『聖峰富嶽三十六景』 昭和 16 年（1941）から昭和 20 年 小泉癸巳男 小泉癸巳男が手掛けた、各地から見た富士山を題材にした版画集。昭和 16 年から制作に取り掛かった。埼玉県への疎開以降、収入・後援者のいないなかで制作された。昭和 20 年 9 月には値上げを検討し、体調が回復次第制作の再開を予定していた。タイトルの通り、36 図の制作が予定されていたが、小泉が疎開先で体調を崩したことにより制作が中断となり、全 23 図（昭和 20 年 10 月）で未完のまま遺作となった。	
 配給絵日記 小泉癸巳男が配給の様子を記した日記。小泉の手紙が貼り付けられており、昭和 20 年 9 月付けの手紙には小泉の近況が記されている。 昭和 20 年（1945）9 月	 「山中湖白暮公魚穴釣」 昭和 16 年（1941）	 「影不二」 昭和 17 年（1942）	 「大秦野の不二」 昭和 18 年（1943）

Ⅱ. 木版画による報告活動と版画集の制作



「諏訪湖の不二」

昭和 18 年（1943）



「あか不二」

昭和 19 年（1944）

Ⅲ. 戦前への回顧と版画家たちの戦後復興 終戦を迎えると、日本は GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）の占領下に置かれ、進駐軍が駐留します。戦前から海外で高い評価を得ていた日本の木版画は、進駐軍兵士からの人気を得て、需要が高まりました。進駐軍兵士やその関係者が版画家のアトリエや版元の商店に出入りし、土産物として木版画を買い求めます。 版画界に活況の兆しが見えはじめた一方で、空襲による国内各地の被害は甚大でした。眼前に広がる焦土を見た版画家たちは、焼け残った版木や材料を集め、戦前の光景を思い起こす版画集の制作に取り掛かります。昭和 20 年（1945）12 月には有志による『東京回顧図会』が刊行されます。戦時下の統制により刊行が中止になっていた版画集も、次第に制作が再開されました。		
東京の空襲被害 昭和 17 年（1942）4 月、東京をはじめ各都市が初めて空襲に見舞われました。昭和 19 年 6 月以降、B29 爆撃機での各都市への空襲が本格化します。 昭和 20 年 3 月 9 日から 10 日未明にかけて、約 300 機の B29 が飛来し、焼夷弾を用いた低空からの絨毯爆撃を行いました。木造家屋が多かったため、強風により延焼が広がり、浅草や日本橋、深川などの下町一帯 40 km²が焼失しました。爆撃は約 2 時間半続き、焼失家屋は約 27 万戸、罹災者は 100 万人を越し、警視庁の調査では死者は 8 万 3793 人、負傷者は 4 万 918 人にのぼる甚大な被害となりました。 その後も、東京は立て続けに B29 による空襲が行われ、東京南部の工場地帯や品川区などの住宅地、東京駅周辺や皇居など千代田区を含めた都心地域が被害に遭いました。		
『東京回顧図会』 昭和 20 年（1945）12 月 刊行：富岳出版社 恩地孝四郎や平塚運一など、版画家 9 名による版画集。富岳出版社と同社の顧問を勤めた恩地が中心となり、新たな日本美術の出発点となるべく刊行した。昭和 4 年刊行の『新東京百景』から転用した木版画と、山口源・前田政雄・斎藤清・関野準一郎・畦地梅太郎の木版画を新たに追加した 6 点を含む計 15 点で構成されている。なお、『新東京百景』からの既刊 8 点については、作品名が変更されている木版画もある。 戦前の風景を回顧するために制作されたが、空襲被害の受けなかった場所の風景も含まれている。恩地の版木を除いて戦災で焼失したため、新たに関野・畦地などが版木を復刻し、富岳出版社の前身である高見沢木版本社工房が彫りや摺りなどの補助をしている。		
		たとう・意趣書 『東京回顧図会』が頒布された際のたとうと意趣書。 昭和 20 年（1945）12 月 「二重橋」 恩地孝四郎 昭和 20 年（1945）12 月

Ⅲ. 戦前への回顧と版画家たちの戦後復興



「赤坂離宮」

平塚運一
昭和 20 年（1945）12 月



「明治神宮」

山口源
昭和 20 年（1945）12 月



「東京駅」

恩地孝四郎
昭和 20（1945）12 月



「九段大鳥居」

川上澄生
昭和 20 年（1945）12 月



「帝大赤門」

前田政雄
昭和 20 年（1945）12 月



「浅草観音堂」

斎藤清
昭和 20 年（1945）12 月



「上野動物園」

恩地孝四郎
昭和 20 年（1945）12 月



「芝増上寺」

山口源
昭和 20 年（1945）12 月

Ⅲ. 戦前への回顧と版画家たちの戦後復興



「赤坂見付弁慶橋」

関野準一郎
昭和 20 年（1945）12 月



「数寄屋橋」

平塚運一
昭和 20 年（1945）12 月



「夜の銀座」

川上澄生
昭和 20 年（1945）12 月



「泉岳寺墓所」

畦地梅太郎
昭和 20 年（1945）12 月



「本所工場地帯」

前川千帆
昭和 20 年（1945）12 月



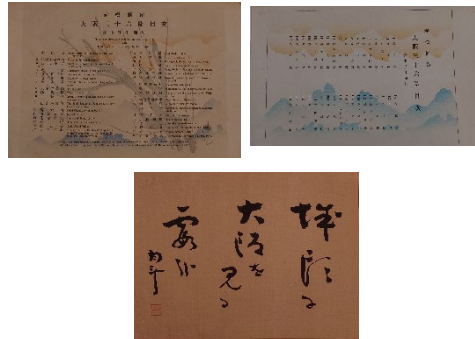
「新宿の夜」

前川千帆
昭和 20 年（1945）12 月

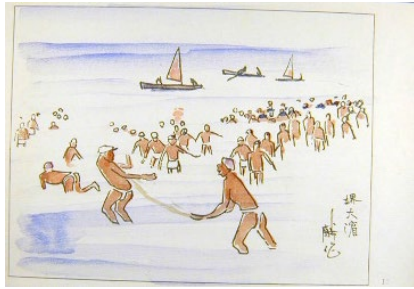
木版画と進駐軍の関わり

終戦後、進駐軍専用の売店である PX（酒保）では、木版画も土産物として人気を博しました。商品確保のため、版画家や渡邊庄三郎の元には木版画の大量発注が相次ぎます。この需要の高まりにより、彫師などの職人が復帰し、版元に活況の兆しが見えはじめました。

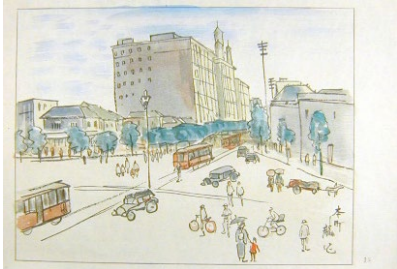
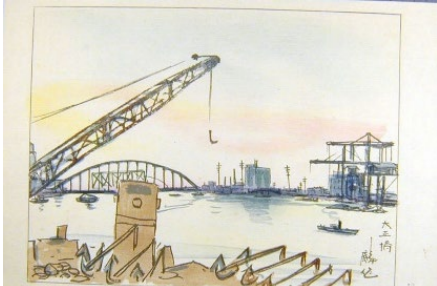
昭和 21 年（1946）2 月、日本版画協会展の再開が決定し、4 月に東京都美術館で開催されます。同展には、恩地孝四郎とも交流のあった米兵 3 名の木版画も陳列されました。また、木版画を収集する進駐軍兵士らが自身のコレクションを軍施設や百貨店などで披露し、木版画の認知を広めていきました。版画家の自宅では、進駐軍兵士に向けた木版画の講習会や交流会も開かれました。

『大阪三十六景』 昭和 22 年（1947） 赤松麟作 刊行：金尾淵文堂 題字：青木月斗 洋画家・赤松麟作による版画集。空襲で被害を受ける前のお阪の情景を描くことを目的として制作され、大阪府内の計 36 か所を題材にしている。 日本語のみと日英併記の目録が用意されており、併記版には土地の解説なども記載されている。 制作に関わった赤松麟作・金尾種次郎・青木月斗は久宝国民学校の同級生で、木版画を赤松麟作が、刊行を金尾種次郎が営む金尾淵文堂、題字を俳人の青木月斗がそれぞれ担当している。		作者紹介：赤松麟作 あかまつりんさく 明治 11 年（1878）～昭和 28 年（1953） 岡山県津山市生まれ。明治 26 年（1893）、挿絵画家の山内 愚僊 の内弟子になり、明治 30 年に東京美術学校（現・東京藝術大学）に入学し、2 年半で卒業した。 卒業後は教職を経て、明治 37 年に大阪朝日新聞社に挿絵画家として入社。写真技術の発展とともに、画業へ専念するために退社し、明治 41 年に赤松洋画塾を開設し、佐伯祐三ら門下生に指導した。その後も昭和 11 年（1936）には学校で教鞭をとるなど、関西での後進育成に力を注いだ。		 目録・俳句 『大阪三十六景』に封入されている目録と俳句。英語併記の目録には画題に選ばれた土地の説明や、制作の意図などが記されている。 昭和 22 年（1947）	
前期  「1 大阪城」 昭和 22 年（1947）	前期  「2 天王寺の鳩」 昭和 22 年（1947）	前期  「3 四天王寺」 昭和 22 年（1947）	前期  「4 戎橋」 昭和 22 年（1947）		

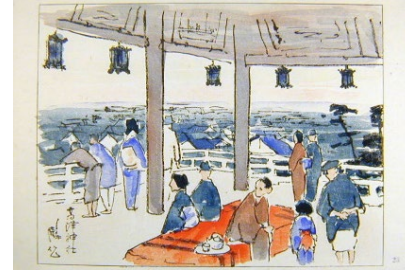
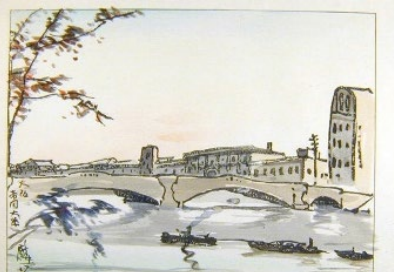
Ⅲ. 戦前への回顧と版画家たちの戦後復興

前期 	前期 	前期 	前期 
「5 宗右衛門町」 昭和 22 年 (1947)	「6 道頓堀」 昭和 22 年 (1947)	「7 愛染堂」 昭和 22 年 (1947)	「8 天王寺公園」 昭和 22 年 (1947)
前期 	前期 	前期 	前期 
「9 動物園」 昭和 22 年 (1947)	「10 一心寺」 昭和 22 年 (1947)	「11 住吉高燈籠」 昭和 22 年 (1947)	「12 堺大浜」 昭和 22 年 (1947)

Ⅲ. 戦前への回顧と版画家たちの戦後復興

前期 	前期 	前期 	前期 
「13 浜寺公園」 昭和 22 年 (1947)	「14 住吉神社」 昭和 22 年 (1947)	「15 本町」 昭和 22 年 (1947)	「16 浪花橋」 昭和 22 年 (1947)
前期 	前期 	後期 	後期 
「17 あみだ池」 昭和 22 年 (1947)	「18 天神橋」 昭和 22 年 (1947)	「19 大正橋」 昭和 22 年 (1947)	「20 川口」 昭和 22 年 (1947)

Ⅲ. 戦前への回顧と版画家たちの戦後復興

後期 	後期 	後期 	後期 
「2 1 四ツ橋」 昭和 22 年 (1947)	「2 2 心斎橋」 昭和 22 年 (1947)	「2 3 高津神社」 昭和 22 年 (1947)	「2 4 豊国神社」 昭和 22 年 (1947)
後期 	後期 	後期 	後期 
「2 5 中央公会堂」 昭和 22 年 (1947)	「2 6 桜の宮」 昭和 22 年 (1947)	「2 7 津村別院」 昭和 22 年 (1947)	「2 8 大阪帝国大学」 昭和 22 年 (1947)

Ⅲ. 戦前への回顧と版画家たちの戦後復興

後期 	後期 	後期 	後期 
「29 御堂筋」 昭和 22 年 (1947)	「30 天満宮」 昭和 22 年 (1947)	「31 控訴院」 昭和 22 年 (1947)	「32 大阪市庁」 昭和 22 年 (1947)
後期 	後期 	後期 	後期 
「33 十三」 昭和 22 年 (1947)	「34 萩の寺」 昭和 22 年 (1947)	「35 箕面」 昭和 22 年 (1947)	「36 箕面の滝」 昭和 22 年 (1947)

エピソード：版画家が刻んだ昭和の彩り 木版画衰退の危機から始まった明治末期以降の木版画において版画家たちは、その美術的価値を高めることで木版画の復興を目指しました。進駐軍が土産物として木版画を持ち帰ったのを契機として、木版画は世界的な認知が高まります。そして、昭和 27 年（1952）に文化財保護委員会（現・文化庁）が新版画の制作工程を保存することを決定しました。戦後における木版画は当初の目的を達成し、現代に至るまで美術作品として広く親しまれるようになります。 現代では美術作品として広く親しまれるようになった木版画は、色彩豊かな情景が描かれる一方で、昭和期の都市構造や社会全体の変容を記録し、現代に伝える貴重な資料でもあると言えるでしょう。			

イベント

(1) ワークショップ スチレンボードで版画作り

日時：令和7年3月23日（日）、4月27日（日）

13：00～16：00

場所：昭和館3階会議室

(2) 展示解説 担当者による展示解説を行います。

日時：令和7年3月30日（日）、4月20日（日）

14時30分～（所要時間30分）

会場：昭和館3階特別企画展会場

昭和13年	6月10日	日本版画協会理事会在開催、前川・畦地・恩地・清宮・山口・逸見・石井・藤森の8名が参加。日本百景版画頒布会について協議の上、新事業として決定。
	6月17日	木版画を主としている協会会員に頒布会に関して賛同と参加を求める文書を発送。
	7月10日	日本版画協会理事会在開催、『新日本百景』第1期50景の候補地や作者の割り当てなどを協議。
	8月20日	池袋にて日本版画協会理事会在開催。前川・逸見・恩地・石井・藤森の5名が出席し、百景について協議。
	8月25日付会報	日本版画協会会報発行にて、新日本百景頒布規定や準備の経過を報告。 石井鶴三「新日本百景版画寸感」 刊行委員に石井鶴三・逸見享・恩地孝四郎・山口進・前川千帆・藤森静雄・畦地梅太郎・清宮彬が名を連ねる。 版画家自身の自摺ではなく、吉田摺師の他摺にて刊行されることが決定。これにより、『新東京百景』に石板画家は参加不可の旨が通知された。
	9月20日	石井宅にて百景委員会を開催、前川・逸見・恩地・畦地・山口・清宮・石井・藤森の8名が出席。
	11月16日	須田町にて理事会兼百景委員会を開催、恩地・前川・逸見・畦地・山口・清宮・藤森・織田の8名が出席。展覧会やその他について協議。
	11月30日付会報	第7回日本版画協会展覧会にて新日本百景第1期作品を陳列することを発表する。 前川「静八丁」下澤「大雪山・招岩」徳力「道頓堀夜景」の計3点を第1回頒布会として12月に発送することを予告、分売不可の旨を再告知。 時局柄、経済的で良いものを作りたいという希望とともに、摺師が病氣だったこともあり頒布の遅延が決定。送料は未設定。
	12月6日	第1回発送を前川宅にて行い、恩地・前川・藤森・吉田が担当。会員15名。
	12月13日	東京府美術館にて第七回版画展を開催、『新日本百景』全50景の内29景を陳列。12月20日まで。
	12月26日	前川宅にて追加発送。
昭和14年	2月5日付会報	『新日本百景』第2回（1月27日刊行）、3回（2月中旬予定）の頒布を予告。同紙にて頒布会の会員を列挙。 木版画を棒に巻いて送付するも不評だったため、ペニヤに挟んで小包として送付することを通知。
	5月27日	須田町アメリカンペーカリーにて会務委員会を開催、平塚・恩地・清宮・深澤・石井・稲垣・前田・逸見・柿原・山口の10名が出席。 山岸・棟方の協会退会に伴い、百景の制作が下澤（十和田湖）琴塚（奈良）に依頼すること、摺刷部数を50部に変更することを決議。
	7月5日	会務委員会が開催、逸見・恩地・田坂・小泉・平塚・柿原・稲垣・永瀬・前川・前田・山口の11名が出席。補充2名が『新日本百景』制作を承諾したことを報告。
	10月1日付会報	新日本百景版画頒布会報告が掲載。当初毎月3枚ずつの刊行を予定していたが、遅れていることを報告。 第1回から6回まで計18景の既刊も報告。第7回は9月下旬を予定していること、事務を前川が担当することを告知。
	12月10日付会報	第7回頒布が完了したことを報告。第8回は12月中旬予定の旨を告知。あわせて、会員の異動があり、制作者に変更が生じているものの、都度会報上で発表することを告知。 前号での50部へ変更することは、便宜上であって100部限定（ママ）であることは変更がないことを弁明。
昭和15年	10月25日付会報	遅延しながらも、33景までは既刊した旨を報告。
昭和17年	8月10日付会報	第13回29景（ママ）を既刊頒布を報告。防諜関係にて予定地の変更や頒布不可能な作品が頻出、一時的に制作が停滞しているものの、物資不足の困難を突破し近いうちの完成を目指すことを表明。
昭和19年	1月20日付会報	現状、再開の目途が立たず、休止を発表。関係者各位に休刊の挨拶状を発送し、状況好転後に再開する旨を告知。既刊の版画家には印税を送付。
昭和21年	2月付会報	日本版画協会事務所が罹災、『新日本百景』の木版画と版木の焼失を報告。